

研究成果報告書

財団法人国土地理協会 平成23年度学術助成研究

「カナダ・ブリティッシュコロンビア州における
火災保険図をめぐる基礎的研究」

河原典史

カナダ・ブリティッシュコロンビア州における 火災保険図をめぐる基礎的研究

立命館大学 河原典史

I はじめに

火災保険図はイギリス、ならびにアメリカ本土、ハワイやカナダで産業革命の進展とともに発行されるようになった。19世紀後半から火災の危険性を査定し、被災後の補償を管理するため、Sanborn MAP & Publish Co.をはじめとする地図出版社は、大縮尺図である“*Fire Insurance Plan(MAP)* (火災保険図)”を作成してきた。カナダ西岸のブリティッシュ・コロンビア州（以下、BC州）では、1885年にビクトリアやバンクーバーなどから作成が開始された。また、都市部以外でも、製材、缶詰や精練などの各種工場とその周辺施設で、同種の地図が作成された。

火災保険図には建物1棟毎に、建築物の形状や用途が記号と彩色によって明示されている。しかし、一般的なマイクロフィルムからの複写だけでは、モノクロのために彩色による地図表現とその読解には限界がある。したがって、原図の所蔵確認とその閲覧・読解にあたっては、各地のアーカイブス（文書館）を縦覧した。また、火災保険図には“*Japanese School*” “*Chinese Apartment*” など、エスニック集団の専用施設なども描写される。そして、地番の記載から、後述する“*BC Directory* (BC州住所氏名録)”と対照すれば、白人以外の居住者も1棟単位で判明する。

つまり、本研究は、モノクロでの判読では明らかにできない諸点の再検討、ならびに他の資料との併用から火災保険図の歴史地理学的活用、特にエスニック集団に関する景観復原の手法の確立をめざす。B. Macdonald “*Vancouver : A Visual History*” (1992) や、R. A. J. McDonald “*Making Vancouver*” (1996) などのカナダ歴史地図の概説書では、火災保険図は紹介に終始し、その景観復原への活用方法は説かれていない。本研究は、都市部での火災保険図の本格的な研究へ発展させ、日本人や中国人などのエスニック集団の居住状況を明らかにする試金石でありたい。

報告書の構成として、まずはBC州の火災保険図の作成経緯・目的や、その描写について概説する。そして、その描写と読解について、カナダ日本人移民が活躍した特徴的な生業が描写されている火災保険図を取りあげる。具体的には、サケ缶詰産業と塩ニシン製造業についての漁業について考察する。その場合、火災保険図が編集された *Plans of Salmon Canneries in British Columbia together with inspection Reports on Each* (1924) (『BC州サケ鮭缶詰工場図集成』) との比較検討を行なう。またカナダ日本人移民のライフヒストリーや、いわゆるエスニック産業としての地位を築いたカーディナー（庭園業）については、*BC Directory* (BC州住所氏名録) との併用による日本人居住区の復原を試みた。

II 火災保険図の概要

1. カナダならびにBC州の火災保険図

Frances M. Woodward や Diane L. Oswald によると、カナダの火災保険図をめぐる発行史は以下のようにまとめられる。

初期の火災保険図で実在しているものとして、1858年頃に発行されたトロントの火災保険図 *Boulton Atlas* がある。この調査・編集は Willian と Henry Boulton によるもので、二人ともカナダ自治領の不動産鑑定士であった。縮尺は 30.48m を 2.54cm、すなわち 1200分の1で、建物の構造を6つに分類し、火災探知機やそれぞれの区域での特徴的な建築手法などが説明されている。

1874年から1875年にかけて、アメリカ・ニューヨークの Sanborn 社 (Sanborn Map & Publish Co.) は、カナダの保険会社や代理店から依頼され、オンタリオ州とケベック州における15都市の火災保険図を作成した。一方、1875年にはトロントとモントリオールで鉄道設計に関わっていた技術者の Chas E. Goad が Sanborn 社が手がけていないケベック州の大都市について火災保険図の作成に着手した。そして、1910年頃には、およそ1,300カ所の都市や数多くの工業用地が火災保険図として描かれた。

Goad による火災保険図の作成には、次のような特徴がみられた。他の保険地図出版社と違って彼は、保険業者が必要としたすべての被保険物の地図作成を引き受け、必要であればその地図を改訂した。つまり、それぞれの保険会社毎に火災保険地図を作るのではなく、複数の保険会社が必要な保険地図をすべて網羅したものを一枚の地図に集成したのである。また、Goad が作成した火災保険図の制作費は安価で、調査費用の一部は地図を購入する数社で按分された。地図は購入した保険会社のみを提供され、改訂版の発行時には、Goad と彼の後継者は旧版地図を回収して廃棄した。しかし、すべてが回収・廃棄されたわけではなく、現存する火災保険図も少なくない。

やがて、Goad に火災保険図の作成を依頼していたカナダ保険協会 (The Canadian Fire underwriters' Association) は自ら地図作成を行うため、保険調査局 (The Underwriters' Survey Bureau Ltd.) を設立し、Goad が作製した地図の権利も獲得した。そして、それはカナダ西部の西カナダ保険協会 (The Western Canadian Underwriters Association) と、BC州やユーコン準州を担うBC州保険協会 (The British Columbia Underwriters' Association) に再編されたのである。

1960年になると、さまざまな火災保険協会が合併し、カナダ保険協会 (The Canadian Underwriters' Association) が設立され、火災保険図の製作は当会の計画課のもとで行われた。しかし、当会は1974年に、保険顧問機構 (The Insurers' Advisory Organization) になり、翌年には火災保険図の製作は中止され、過去に作成された地図は処分された。しかし、その地図史上の重要性や歴史・地理・建築学などの研究において極めて重要な資料であることから、火災保険図は各地の大学や図書館などに売買され、保存されるようになったのである。

BC州の火災保険図については、1885年に最初の火災保険地図が Sanborn 社によって作成された。対象となったのはバンクーバーの中心地であるグランビル (Granville) とイェール (Yale)、ならびにビクトリア (Victoria)、ニュー・ウェストンミンスター (New Westminster) とナナイモ (Nanaimo) である。前述したように、やがて Sanborn 社に代わって、1897年から Goad がバンクーバーの火災保険図を作成し、その後の火災保険図の諸事業はBC州保険協会が担うようになった。とりわけ、当州の主要産業であったサケ缶詰産業を支えるキャナリー (サケ缶詰工場) については、詳細な大縮尺図が作成された。

なお、建物の新・改築や取り壊しなどの変更事項について、それを描写した紙片を貼り付ける作業がなされていた。また、1951年以降では地図の標準サイズは、それまでの 25inch×21inch から 13inch×12inch に縮小された。それと同時に、貼紙による改訂作業は継続されなくなり、改訂版が必要になるたびに新たに作成・印刷されたのである。

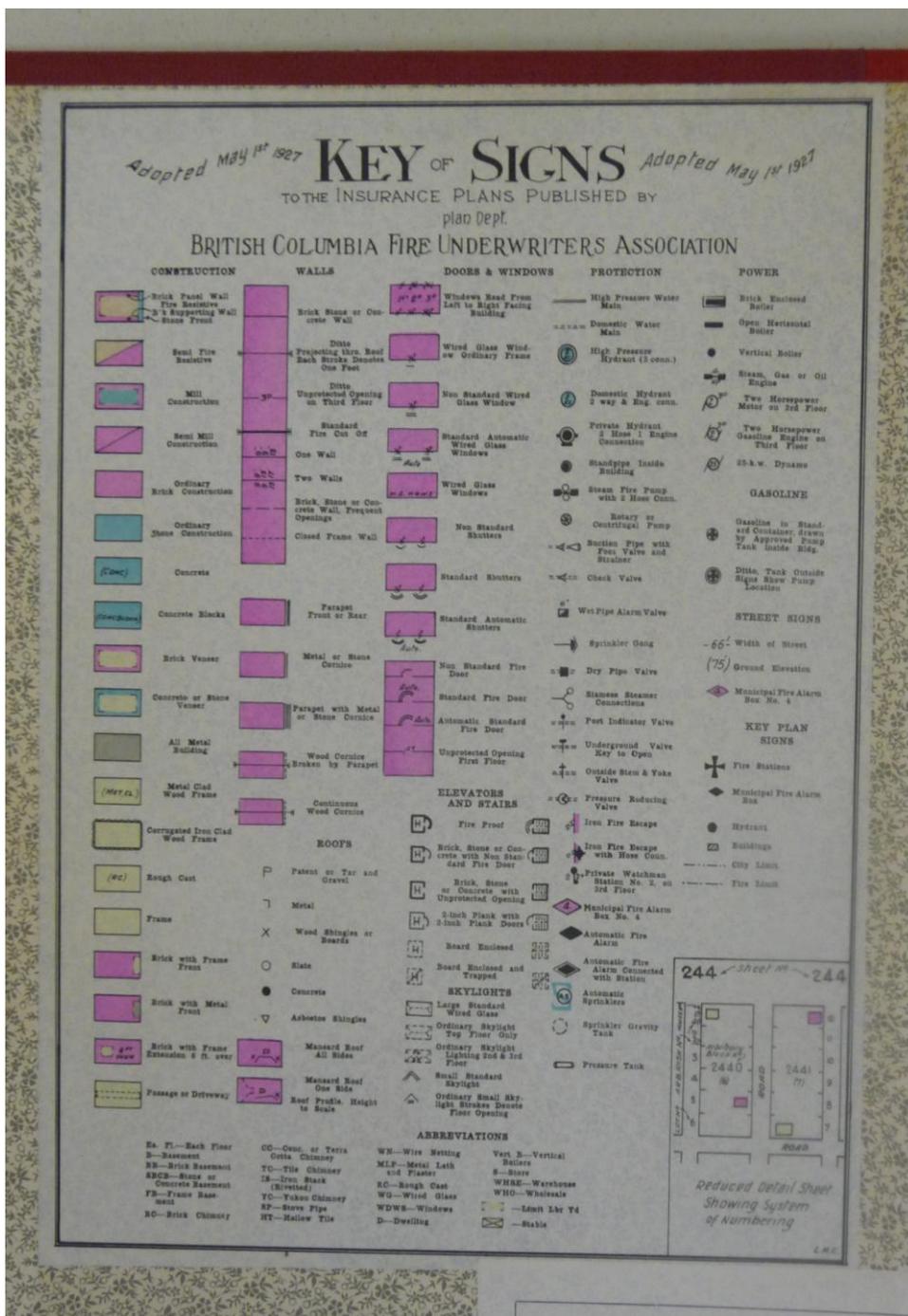
2. チュマイナスの火災保険図

多くの火災保険図は 15m (30m あるいは 60m) を 2.54cm で表記、つまり約 600分の1 (1200分の1・2400分の1) からなる大縮尺地図である。この地図を特徴づけるものとして、家屋やその付帯施設が記号や彩色で表記されている。建物の建材、大きさ、形、ドアや窓・煙突の数、火災探知機や消火器・スプリンクラーの防火設備などが細部にわたって描かれているのである。工場の場合には、使用されている機械の種類や工場内の発電方法まで示されている。それは機械や発電機関の加熱によって、火災を起こす危険性があるからである。また、工場労働者の稼働時間帯や、夜間の見回りの有無なども併記されている。

それでは、彩色と記号について、具体的に説明しよう。事例としたのは、バンクーバー島東岸のチュマイナス (Chemainus) の火災保険図である。第二次世界大戦以前、当地ではビクトリア伐木・製材会社 (Victoria Lumber and Manufacturing Co.Ltd.) が操業しており、そこに従事する日本人も多かった。そのほか、近隣の塩ニシン製造業に関わる日本人もみられた。当地の火災保険図は 1936年にBC州保険協会によって作成され、1946年に一部改訂後、1957年に全面改訂されている。火災保険図の所蔵に関わる Frances M. Woodward のデータベースによれば、2種類の火災保険図はブリティッシュ・コロンビア大学の特別資料室 (Rare Books & Special Collections Precision) に所蔵されているようである。しかし報告者は、現地のチュマイナス博物館 (Chemainus Muesam) でオリジナルを閲覧・撮影する機会を得た。

合計 5枚からなる火災保険図は、朱色の表紙からなる厚紙に糊付けされている。1枚の大きさは、標準的な 25inch×21inch であり、資料的には残念ながら中央で 2つ折りされた状態で保存されている。表紙の裏面には、この火災保険図がBC州保険協会火災課で作成されたことを示す書類が張られている。一定の書式からなるこの用紙には空欄がいくつかあり、作成対象の地域名がタイプされるようになっている。さらに裏表紙には、1927年に設

定された凡例 (Key of Signs) が貼られている (第1図)。それは、彩色で示された建物構造と、さまざまな記号で示された付属施設を示すものとに大別される。前者については、おもにピンク色のレンガ、水色の石、灰色の鉄鋼、そして黄色の木造に分類されている。記号については、多種多様で、例えばスプリンクラーや発電機などの設備のほか、窓や壁の構造が記されている。



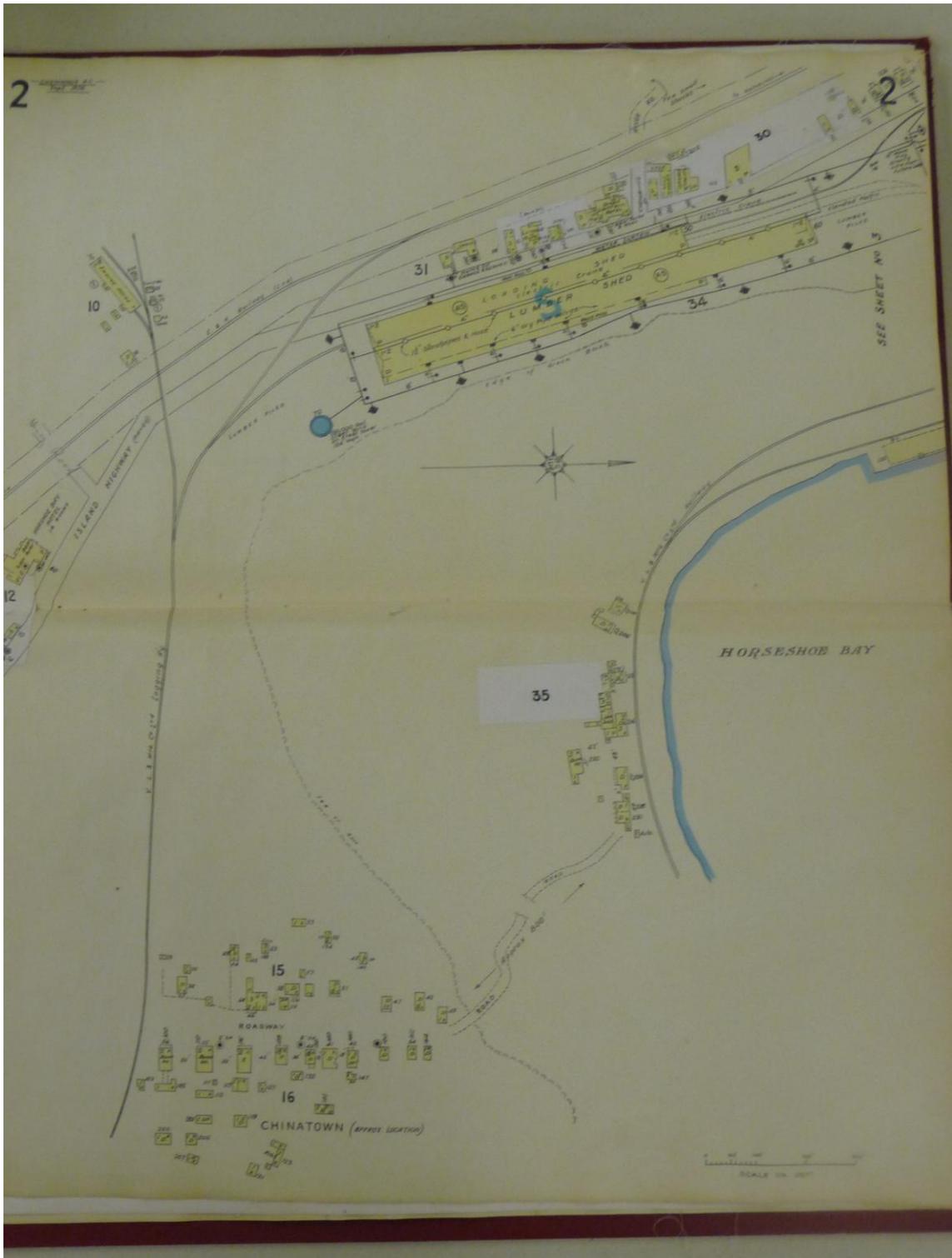
第1図 火災保険図の凡例

歴史地理学的アプローチから地域性を考察する場合、その建物の利用形態を知ることは重要である。一般的な住宅には“D (Dwelling)”の記号が付され、比較的大きい建物の場合には具体的な名称が記されている。また、街路に沿って地番が付されている点も、後述する住所氏名録との併用による景観復原に活用できる。

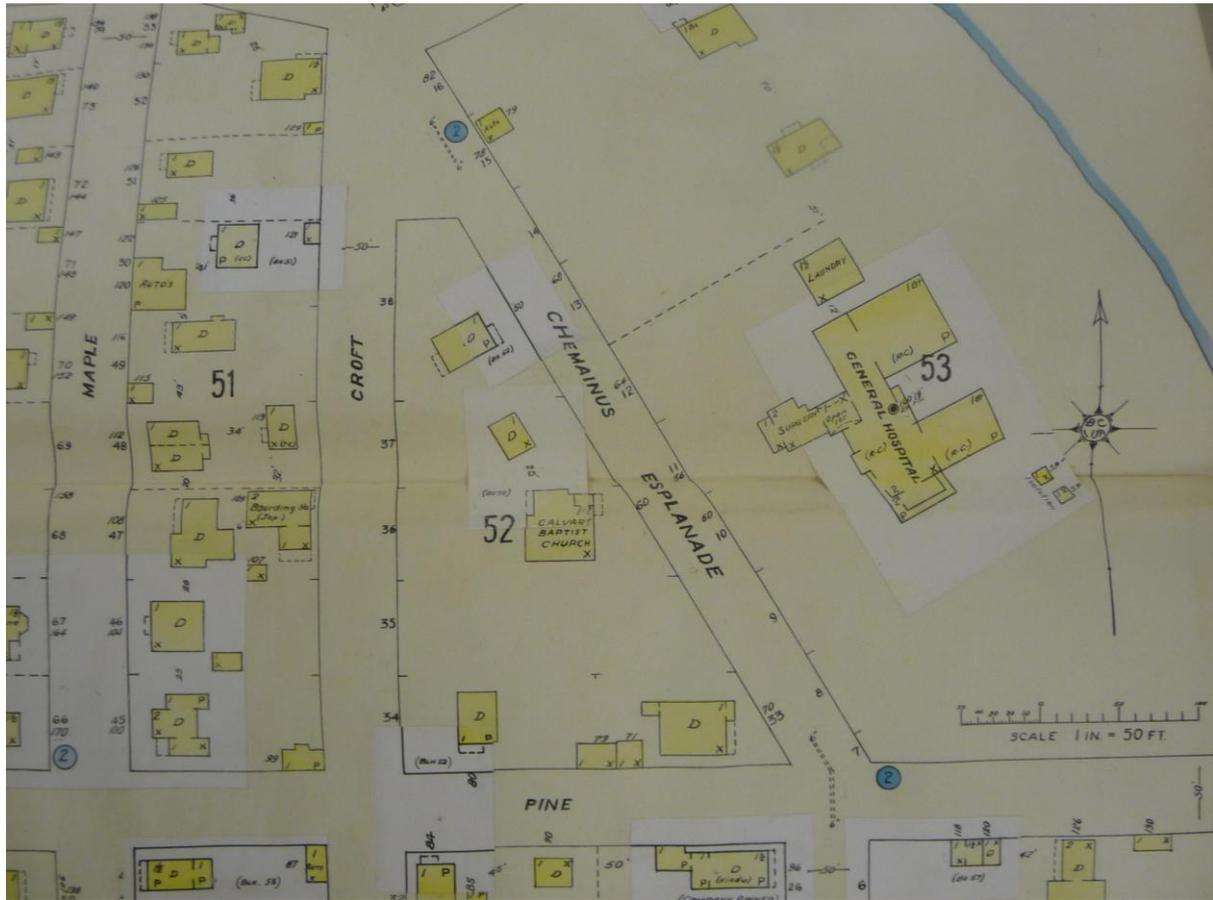
No.1 と左肩に印字された 1 枚目 (第 2 図) には、索引地図 (Key Plan) が描かれており、No.2~5 までの火災保険図があることが示されている。これを見ると、カナダ太平洋鉄道のチュマイナス駅の北側には、引込線が連なるホーシュ湾 (Horseshoe Bay) 沿いに製材所が建ち、整然と区画化された住宅地が北接している様子を読みとれる。そして、No.2 (第 3 図) には、長大な木材倉庫が描かれている。注目したいのは、倉庫の東方に描かれた狭小の木造住宅群である。“CHINA TAWN”と併記されていることから、ここは製材所に従事する中国人居住区だったのである。No.3 には、ビクトリア伐木・製材工場の製材所が描かれ、それらには防火に関わる設備について、さまざまな記号が付されている。その他、広大な貯木場が隣接している様子もわかる。そして、No.4・5 は、整然と住宅が建ち並び、北端には海岸を見下ろすように病院の立地が確認できる。ところが、この 2 枚の地図には、白い貼紙が多くある点に注意しなければならない。これは 1946 年に施されたもので、もとは日本人に居住に関わる描写があったに違いない。唯一、No.5 (第 4 図) の中央部を縦断するメープル街の 47 番地をみると、“Japanese Boarding Ho”の文字が写っている。おそらく、これは戦前のチュマイナス日本語学校の痕跡であろう。BC 州各地の日本人集住地には、週末を中心に日本語学校が多く設置されていたのである。



第 2 図 チュマイナスの火災保険図 (1) —索引地図 (Key Plan) —



第3図 チュマイナスの火災保険図(2)
—長大な木材倉庫と“CHINATAWN”と併記された狭小の木造住宅群—



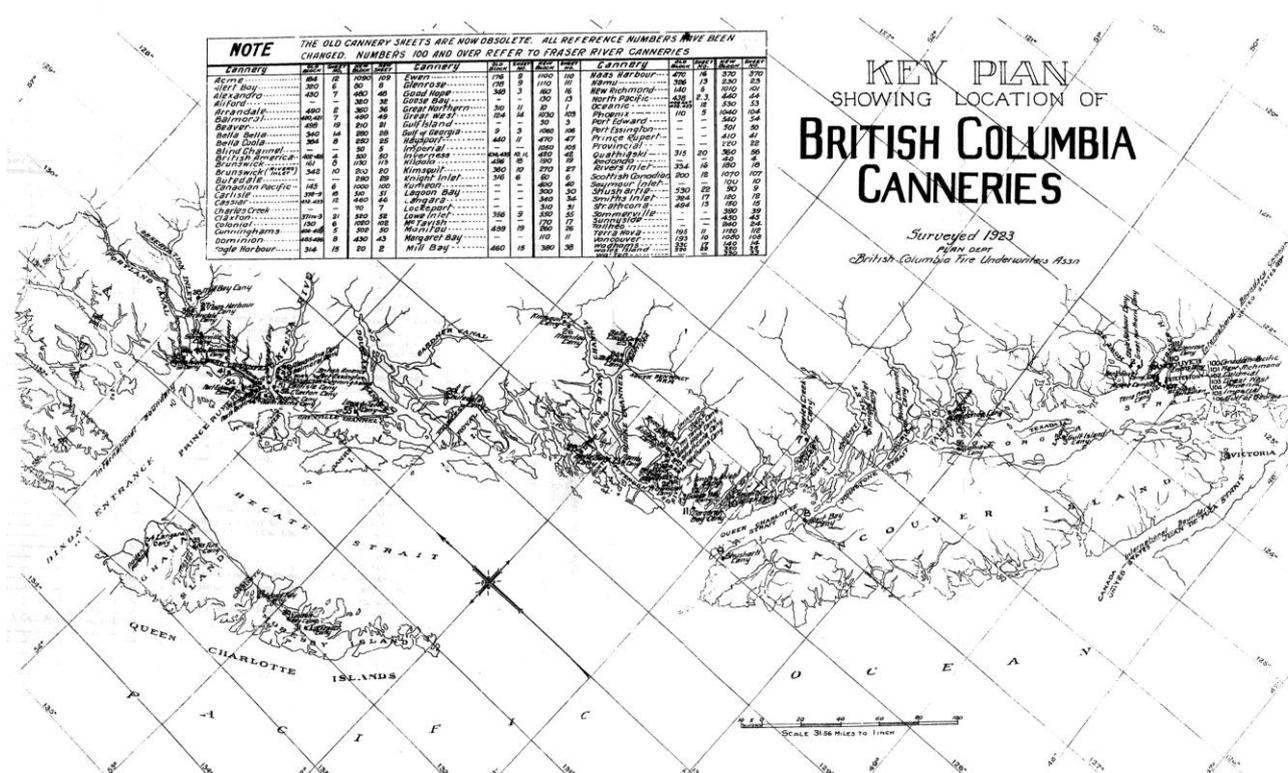
第4図 チュマイナスの火災保険図[一部] (3)
 —メープル街の47番地に“Japanese Boarding Ho”の文字が写る—

Ⅲ サケ缶詰産業と火災保険図

1. BC州サケ缶詰工場集成

火災保険に関わる事業のため、原野・荒地など建築物がみられない地域では、この地図は作成されなかった。しかし、BC州では製材所、採掘所などが各地に立地し、必ずしも都市域だけで火災保険地図が作成されたわけではない。1924年にBC保険協会が編集・発行した“*Plans of Salmon Canneries in British Columbia together Inspection Reports on Each* (BC州サケ缶詰工場集成図)”は、当時BC州の主要産業の1つであったサケ缶詰産業を担うサーモン・キャナリー(サケ缶詰工場)の火災保険地図とその解説からなる。この集成図は、ブリティッシュ・コロンビア大学の特別資料室(Rare Books & Special Collections Precision)に所蔵され、1992年には163枚のマイクロフィルムに複写されている。ただし、この複写版はモノクロである。とはいえ、モノクロでもサケ缶詰工場のように、そこに従事する日本人の様子について読解できることは少なくない。

1枚の索引図(第5図)と目次に続いて、1ヶ所ずつ合計47のキャナリーが1200分の1、または600分の1の縮尺で描かれている。地図の右肩に付された番号が113までであることから、BC州に点在する100以上のキャナリーのうち、重要なものだけが採録されていると判断される。その手順として、1897年にフレーザー川流域、1915年にはスキナー・ナース川流域におけるキャナリーの火災保険地図がすでに作成されていたことが、索引図の注釈から推察される。当時、100ヶ所以上あったキャナリーのうち、1923年8月から10月にかけて再調査された72キャナリーが当地図集成収められたようである。地図と同形の解説書において、1枚目の右側には、Fish Cannery Surveyとして、各キャナリーの基礎データが記載されており、当時のサケ缶詰産業の様子やその展開が理解できる。そこには、キャナリーの名称・所有社 本社・支配人に続いて、創業年(途中の休業年の有無)、年間の操業月、サカイ・コーホーなど材料となるサケの種類や、過去5年間(1918~1922年)の生産数(pack)などが記されている。に続いて、ストライキなどの労働問題、過去の火災の有無、建物・機器評価額や過去の火災(保険金)の授受の有無など、まさに保険業に直接関わる情報も示されている。移民研究において、とくに興味深いのは、雇用者の国籍までも併記されていることである。なお、解説の最下段には、調査日が記され、それによると1923年8月から10月にかけて記録が採られたようである。



第5図 BC州サケ缶詰工場図集成一索引地図 (Key Plan) 一

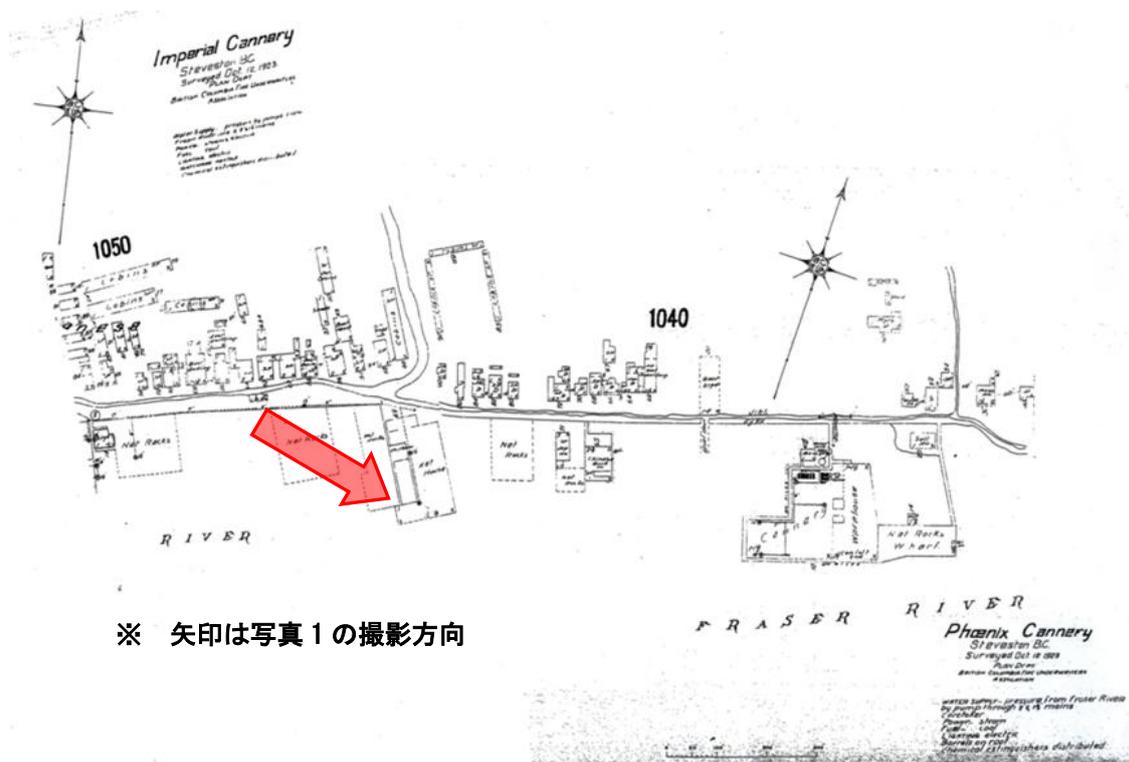
これらの基礎データに続いて、1枚目の左側から、2枚あるいは3枚の別紙には、項目毎により詳細な説明がある。まずは、缶詰工場の中核にあたる **Cannery Building** についての構造・面積・階層・屋根材料・動力の様子が理解できる。機械については、**Iron Chink**（鉄の中国人）と称される、数枚の刃によって一度に数匹のサケを切断することができる機械の存在も確認できる。**Processes** では、生産ライン数、塗料庫、塩蔵庫、冷凍・冷蔵庫、缶製造機など、生産工程の詳細が記されている。他にも、ボイラー棟、燃料棟などの大型付属施設がある場合、それぞれについての建物構造が記される。さらに **Occupancy** からは、缶詰製造業をめぐる関連産業の存在が確認できる。つまり、鍛冶師・大工・桶屋・機械工・船大工などの職工や、漁網・燃料保管庫なども付属建物の存在が記されている。そして、最後には、禁煙表示や消火栓など火災防止に関わる設備が記されている。これらの建物・施設には番号が付され、地図と対応できる。

2. BC州サケ缶詰工場図集成にみるサケ缶詰産業と日本人漁業者

次の資料と写真はフレーザー川本流の河口にあったフェニクス・キャナリー・インペリアル・キャナリーを描いた火災保険図と現存する施設の一部である（写真1・第6図）。そして、フレーザー川北流の中洲にあるシー島にあったバンクーバー・キャナリーについて、いくつかの解説を試みよう。



写真1 日本人漁業者の記念碑と工場跡（2011年8月 河原撮影）



※ 矢印は写真1の撮影方向

第6図 BC州サケ缶詰工場図集成にみるフェニス・キャナリーと
インペリアル・キャナリーを描いた火災保険図

1898年に建設費 20,500 ドル、機械費 50,000 ドルを投じてバンクーバー・キャナリーは建設された。ベニザケやギンザケなどを原料として 1918年には 16,000 箱、その後も 1919年：22,000 箱、20年：11,000 箱、21年：4,000 箱、22年：13,000 箱が生産されている。各年の生産量からは、缶詰産業をめぐる景気変動の大きさが看取できる。

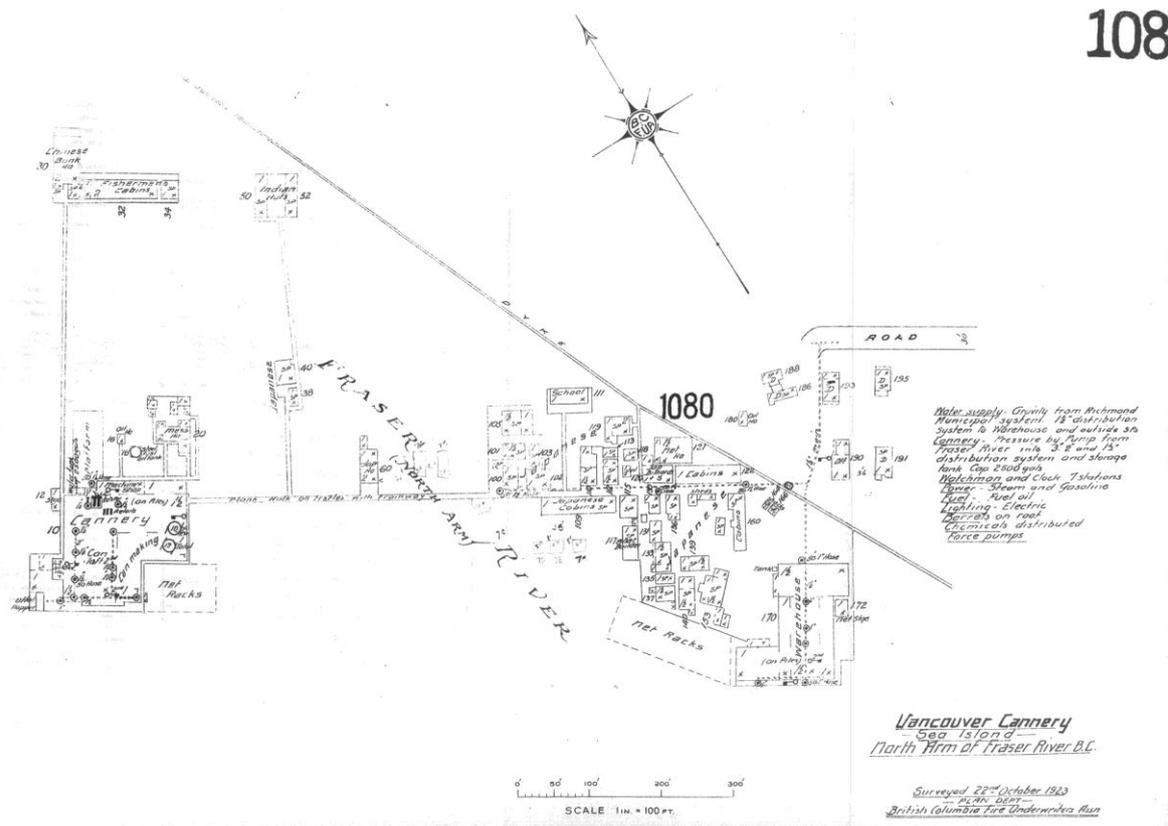
火災保険図には、フレーザー川北流岸に水上家屋としてキャナリーが建てられている様子が描かれている。ほとんどのキャナリーと同様、狭義の缶詰工場 (Cannery) と 16,940 平方フィートの缶詰倉庫 (Warehouse)、ならびに雇用者の居住区は離れており、それらは栈橋で連絡している。西方に位置する缶詰工場は 26,456 平方フィートからなり、7月から11月のサケ缶詰製造前に、ここでは4月から7月には空缶の製造も行なわれていた。工場の北西部には漁獲されたサケ類を運び込む鮮魚台 (Platform)、南西部には漁獲に利用される刺網 (Gillnet) を乾燥させる網干場があった (第7図)。

缶詰工場の北側にインディアン・中国人、東側には日本人居住区があった。前者はさらに、西側の中国人と東側のインディアンとに居住区が分かれていた。インディアンは小屋 (Indian Hut)、中国人は寝台舎 (Chinese Bunk) であるのに対し、日本人については簡易住居 (Japanese Cabin) という火災保険地図の表記である。インディアン住居と中国人住居が 1 棟ずつであるのに対し、やや設備の整った数多くの住居が日本人居住区には連立している。『BC州サケ缶詰工場図集成』からは民族別の従業員数は把握できないが、他民

族よりも日本人が多かったようである。住居の質が向上しているのは、日本人が最後にサケ缶詰産業に組み込まれたため、その間に居住環境が整備されたからであろう。インディアンや中国人に対し、1908年のレミュー協定による移住制限後、日本人は単身の出稼ぎから妻子を呼び寄せた家族単位での居住が多くなったことも見のがせない。

日本人居住区には、Cabin 以外にも網小屋 (Net House) や小屋 (Shed) のほか、造船所 (Boat Builder) が確認できる。漁船や運搬船の新造・修理のため、多くのキャナリーには船大工が雇用されていた。とりわけ、1910年代に生じた船舶の動力化では、日本人が担うことが多く、それは伝統的な船大工輩出地である和歌山県東・西牟婁郡出者が務めた。このように火災保険地図に造船所が描かれ、その血縁関係からのインタビューだけでなく古写真の提供があるにも関わらず、当資料では鍛冶屋の存在は明記されているがものの、船大工のそれはない。前者はヨーロッパ系、とくにアイルランド人の従事が一般的であったため、日本人に関する調査はやや詳細に欠けていたのかもしれない。

日本人居住区には、娯楽・教養施設もあった。前者として、ビリヤード場 (Billiard)、後者には学校 (School) が設置されていた。当時、玉突き場や球場と呼ばれた前者を経営する日本人も多く、キャナリーでの娯楽を提供していた。後者は1914年5月に開校されたノースアーム国民学校で、それは後にシーアイランド日本語学校と改名された。1940年には44名の生徒が在籍していた当校では、公立学校とは別に、2世の子息が週末に日本語を学んでいたのである (第7図)。



第7図 BC州サケ缶詰工場図集成にみるバンクーバー・キャナリー

IV 塩ニシン製造業と火災保険図

カナダ日本人漁業史において、塩ニシン製造業はサケ缶詰産業に対してほとんど看過されてきた。当時、カナダ水産界においてニシン（鮪・鯧・Herring）は重要視されず、一時的とはいえ、その加工業は日本人漁業者の独占的な産業となった。その一方で、同業に従事した日本人がサケ缶詰産業以上に厳しい排斥をうけたことも否定できない。そして、サケと異なる加工方法が採られたニシンについては、その輸出先が異なっていた点も興味深い。

1908（明治 41）年頃には、バンクーバー島東岸に 43 カ所の塩ニシン工場が建設された。当時のカナダ水産界では、魚肥としての加工や魚卵（カズノコ）の採取が禁じられたため、ニシンは塩漬けされて日本へ輸出されるようになった。当時、ナナイモを中心とするバンクーバー島東岸では 8 組の塩ニシン工場の経営者が確認できる。彼らの出身地をみると、1902 年頃に塩ニシン製造に着手した和歌山県比井崎出身の大出竹次郎をはじめとする和歌山県日高郡の人たちは 6 名を数えた。有田郡と海草郡出身者も各 1 名で、和歌山県出身者が塩ニシン製造業の中心であった。その他には、大阪・東京・新潟・岩手・広島・千葉・鹿児島出身者が同業に着手していた。興味深いのは、塩ニシン製造業は共同経営を採ることが多かったことである。その理由として、日本人漁業者の多くが就いていたサケ刺網漁業のように、契約したキャナリーから漁具を借用するのではなく、塩ニシン製造業は大規模な漁具・漁業施設を自己所有する必要があるからである。製造所の建物や栈橋、タンクや漁網、網船、ガソリン船、小型船、付属品などを合わせると、当時でも多額の資金が必要であった。これらの施設を揃えるには、季節的な出稼ぎだけでは不可能であり、有力な数人で共同出資したのである。

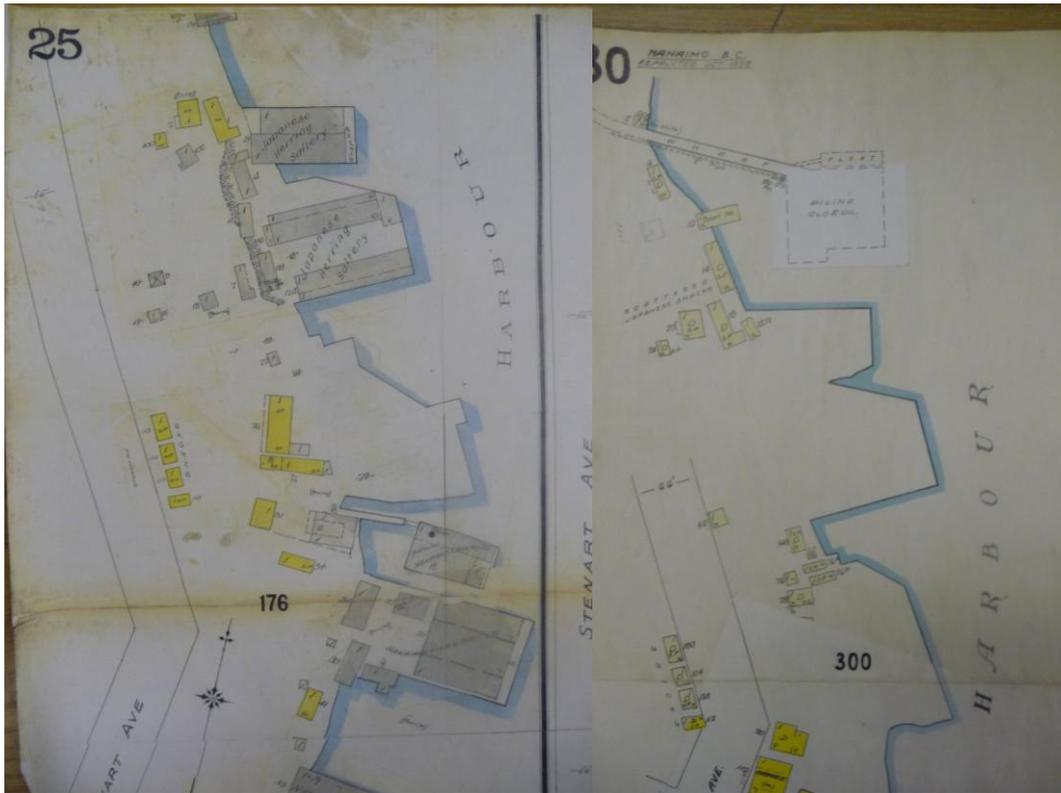
このような塩ニシン製造業について、火災保険図ではどのように描かれているのか検討してみよう。火災保険図の所蔵に関わるデータベースによれば、先述したようにナナイモの地図は BC 州で最も早い 1885 年にサンボーン社によって作成されている。その後、Chas E. Goad は 1895・1909・1916 年に火災保険図を作成や修正をした。その後、1920・1938・1951・1954・1957 年に BC 州保険協会によって火災保険図の作成・修正が行われている。戦前の日本人による塩ニシン製造業を考察するため、報告者は当時に作成されたオリジナルをナナイモ公文書館で閲覧・撮影を行った。

塩ニシン工場は、ナナイモ市街地の北東部におけるナナイモ湾岸に連立していた。1909 年に作成された火災保険図（第 8 図）をみると、市街地北東部のスチュアート街沿いにくっつかの塩ニシン工場が描かれている。長方形の工場本体とそれに隣接する付属施設は、すべて灰色に着色されていることから、これらの塩ニシン工場群はおもに鉄骨建築であったようである。そして、北側の 3 棟の工場には、“Japanese Herring Saltery”と記され、日本人による経営がうかがわれる。そして、中央部に 2 棟の“Japanese Herring Saltery”とそれに隣接した“造船所（Boat Bilder）”も描かれている。ただし 1916 年の修正によって、それらには貼紙がなされ、2 棟の工場は図上から消失している。それに対し、北側の 3

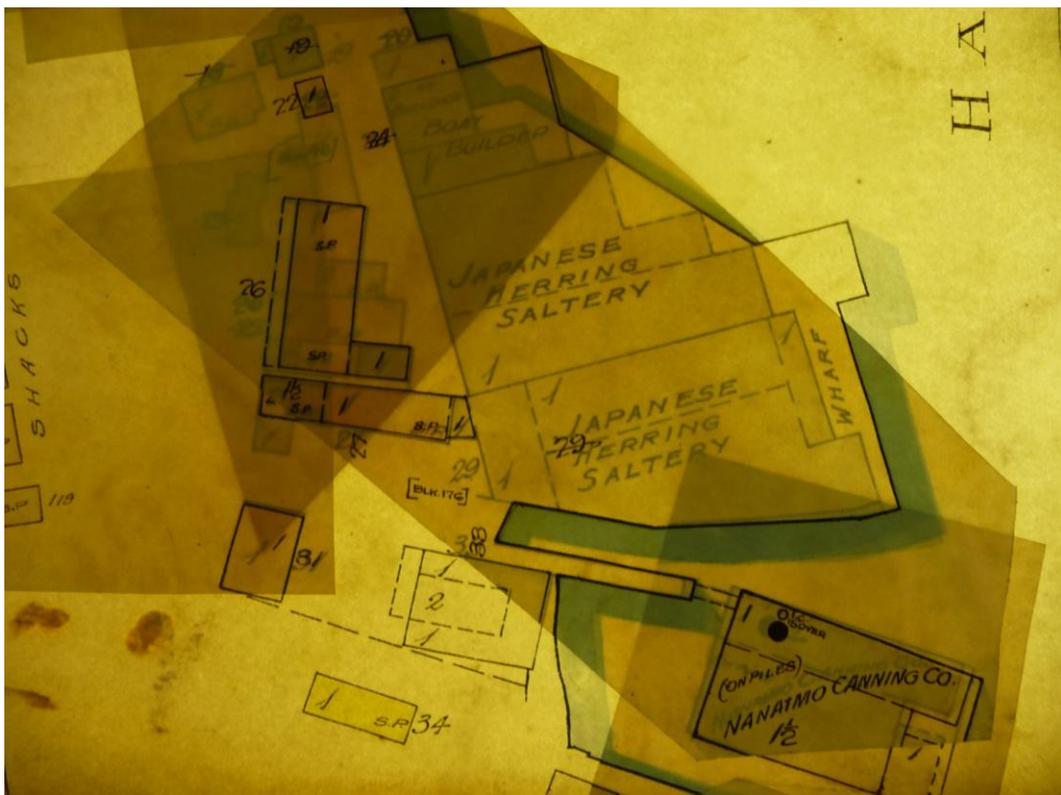
棟は実は貼紙により描かれた塩ニシン工場であることがわかる。ナナイモ文書館では火災保険図は1枚ずつ保存され、貼紙による修正も投射台を使って読解することが可能であり、かかる変遷が把握できる（第9図）。このような塩ニシン工場をめぐる描写の変化は、1910年9月23日と27日に発生した火災による。2回の火災によって、日本人が経営していた塩ニシン工場は焼失したのである。この火災については、1910年9月23日『大陸日報』に、「ナナイモの大火—同胞キャンプ四軒焼失—」、9月27日には「又ナナイモの火事」の記事が掲載されている。

次に発行された1938年の火災保険図をみると、5棟の塩ニシン製造業はすべて取り壊されている。そして、工場跡には“Japanese Shacks”と明記された狭小な住宅が描かれているにすぎない。塩ニシン工場は、ナナイモ沖のデパーチャー湾に浮かぶニューキャッスル島に移転したようである。1912年に東京都出身の榎野運之助、1918年には大出竹次郎と大分県宇佐郡出身の松山豊三とが連携し、ニューキャッスル島にニシン工場が建設された。バンクーバー文書館には、1938年にG. Gorgensenが描いたナナイモ周辺の海図（第9図）が保存されており、それにはニューキャッスル島の北西部に4棟の塩ニシン工場が描写されている。北から順にTANAKA（田中）、CASNO（榎野？嘉祥？）、ODE（大出）、南側はP.T.SANG（孫？）と、経営者らしき名前が記されている。なお島には、現在でも栈橋の一部、漁船の引き揚げ場やボイラーの痕跡などが残っている。

ところで、日本人住宅の表記にも目を向けておきたい。“Shacks”とあるように、彼らの住居は掘立小屋のような粗末なものであった。塩ニシン製造業は、秋から春にかけての季節的な労働であり、いわゆる出稼ぎ小屋としての機能しかなかったのだろう。前述したバンクーバー・キャナリーでのインディアン・中国人・日本人住居の表記の差異と同様、火災保険図には住居の種類が付され、その生活状態を推測することができるのである。



第 8 図 ナナイモの塩ニシン工場に関する火災保険図（1909 年（左）と 1938 年（右））



第 9 図 1909 年に作成された火災保険図へ 1916 年に貼紙がなされた様子

日本人集住地区の景観復原

1. 火災保険図と住所氏名録

カナダ日本人移民史をめぐる研究では、パイオニアへの賞賛や排斥の実態、ならびにマイノリティとしての異文化性が偏重されてきた。そのため、近年では、その種の研究が 1988 年のリドレス運動（戦後保証運動）へ貢献した点を評価しつつ、第二次世界大戦以前の日本人の生活を再検討した実証的研究が望まれている。

先行研究では多くの日本語資料が活用されてきたが、生業に関する歴史地理学的アプローチは不十分であった。例えば、バンクーバーの日本語新聞社・大陸日報社が発刊した『加奈陀同胞発展大観 附録（1922）』、『加奈陀在留邦人人名録（1926）』、『ビシー州日本人電話帳（1931）』や『在加奈陀邦人人名録（1941）』などの日本人名簿（住所・氏名録）では、ひとまわり大きい文字の有力者には職業も併記されているが、それでも産業別の大分類しか判明しない。彼らの一部は巻末や欄外に広告を掲載しているため、ある程度の業種はわかるものの、詳細な生業やその変遷までは看取できないのである。

そこで本章では、大阪府泉南郡北中村（現在の泉佐野市）出身の丸野吉太郎とその家族のカナダ・バンクーバーでの活躍について、“BC Directory（BC州住所氏名録）”と火災保険図との併用によって、彼らのライフヒストリーを描く試論を提示してみよう。使用した火災保険図はバンクーバー文書館所蔵のマイクロフィルムからのコピーである。

2. 大阪府出身の丸野ファミリーの事例

丸野家を日本語資料に最初に確認できるのは、『加奈陀同胞発展史 第二（1917）』である。これには、吉太郎が西 5 番街 221 番地（221 West 5th.av.）において丸野商店・丸野精米所を経営していたことが記され、広告まで掲載されている。丸野吉太郎が北中通村中庄出身である事実は、『加奈陀同胞発展大観 附録（1922）』の名簿で確認できる。彼の渡加年を知るには、旅券などの公文書を紐解かねばならないが、幸いにもバンクーバー東郊のバーナビー（Barnabie）にある日系カナダ博物館（JCNM）には、1 世を中心とする日本人移民へのインタビュー（聴き取り）調査資料がある。これによれば、1883（明治 16 年）生まれの吉太郎が渡加したのは、24 歳の 1907 年である。当初、彼はドゥフェリン（Dufferin、現在の BC フェリー発着港・ホーシュベイの近く）に居住したことから、近隣のサケ缶詰工場、またはそこへのサケを漁獲する刺網漁業に就いたと思われる。

彼が渡加した 1907 年には、日本人への排斥からバンクーバー暴動が発生した。これにより、翌 1908 年にはレミュー協定が制定され、日本人の移住が制限された。ただし、家族の呼び寄せは例外であったので、吉太郎は渡加 3 年後の 1910 年に同齡の妻・美枝を呼び寄せた。『加奈陀同胞発展大観 附録（1922）』には、カナダ生まれの場合、氏名に「加生」の文字が付記されている。この注記がない長男の佐一郎は、日本で生まれたようである。JCNM にある彼の渡加記録は、1916 年であり、わずか 13 歳で両親の待つカナダへ渡ったようである。彼の生誕が 1903 年であることから、吉太郎と美枝との婚姻は 1902 年以前と考える

のが妥当であろう。

長男の佐一郎と同様、名前に含まれる数字から、JCNMの資料にある栄三郎は三男と考えられる。『加奈陀同胞発展大観 附録（1922）』に表れない彼もまた、日本で生誕後に渡加したのである。それは1923年、彼が16歳の時であった。すると、母親の美枝が1910年に渡加したので、1907年生まれの彼は物心つく3歳頃から思春期の16歳まで、母親の存在を知らなかったのだろう。この名簿には、長女・喜美、次女・千鶴ならびに四男・美雄も記されており、彼女らには「加生」の文字が付されている。つまり、吉太郎が妻・美枝を呼び寄せた翌年の1911年から同書の調査がなされた1921年までに3人の子供たちはカナダで生まれたのである。

1907（明治40）年に単身での渡加後、カナダへ妻子を呼び寄せ、さらに子宝にも恵まれた吉太郎は、前述した西5番街221番地（221 West 5th.av.）での商店・精米所の営業に留まらなかった。『加奈陀在留邦人名録（1926）』によれば、パウエル街568番地（568 Powell st.）に転居した彼は、和洋食料品・雑貨店を開業したようである。しかし、その間の生業暦は、大陸日報社が発刊した報告書・名簿類だけでは明らかにされない。

そこで、BC州において毎年刊行される“BC Directory”と総称される住所・氏名録を活用する。これには、バンクーバーやビクトリアなどの大都市では街路毎に居住者、アルファベット順に居住者の職業が記されている。その他の集落では、アルファベット順に居住者と住所が並べられている。1880年代から発刊されてきたこの資料は、さまざまな変遷を経てきた。1920年代までは日本人の情報は不正確で、苗字（Family Name）のみ記され、名前（First Name）はイニシャルだけの場合もあった。なかには単なる「Japanese」、誤

第1表 バンクーバーにおける丸野家の活動

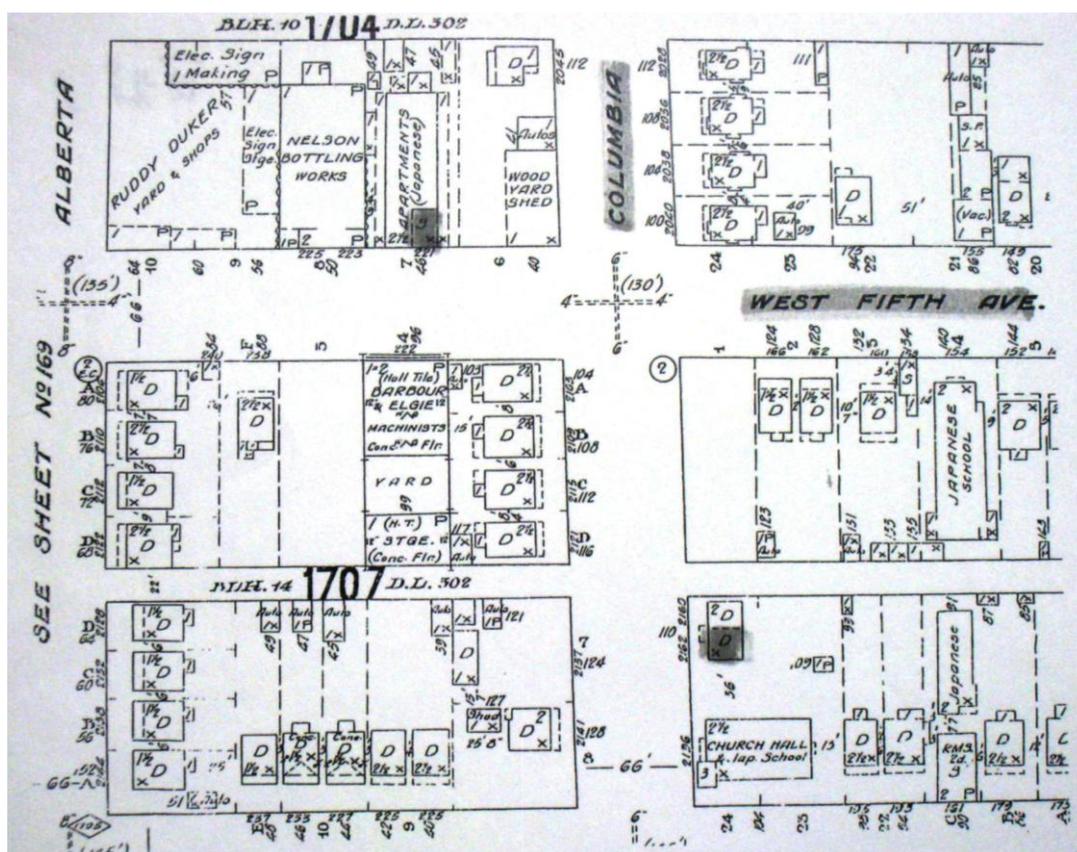
年	氏名	続柄	職業	就業地	居住地	備考
1914(大正2)	K(吉太郎)	世帯主	雑貨店	Lansdown 174	Lansdown 174	
1917(大正6)	K(吉太郎)	世帯主	雑貨店	W.5th. 221	W.5th. 221	転居・アパート併設
1926(昭和1)	K(吉太郎)	世帯主	雑貨店	Powell 568	Powell 568	転居
1928(昭和3)	E(栄三郎)	世帯主	菓子製造業	Powell 568	Powell 568	転業
1935(昭和10)	Eizaburo(栄三郎) Kichitaro(吉太郎) Hinako	世帯主 父 三女以下?	ユニオン魚店事務 ユニオン魚店店主 学生	Powell 469 Powell 469	Alexander 521 Alexander 521 Alexander 521	転業 別項による開業前年
1936(昭和11)	Eizaburo(栄三郎) Hinako	世帯主 三女以下?	ユニオン魚店店主 ユニオン魚店事務	Powell 469 Powell 469	Alexander 521 Alexander 521	経営権の譲与 家業援助
1937(昭和12)	Eizaburo(栄三郎) Hinako	世帯主 三女以下?	ユニオン魚店店主 ユニオン魚店事務	Powell 469 Powell 469	Pandora 2565 Alexander 521	住居移動
1939(昭和14)	Eizaburo(栄三郎) Hinako Kichitaro(吉太郎)	世帯主 三女以下? 父	ユニオン魚店店主 ユニオン魚店事務 ユニオン魚店店員	Powell 469 Powell 469	Pandora 2565 Alexander 521 Alexander 521	40年、吉太郎帰国・死亡?
1941(昭和16)	Eizaburo(栄三郎) Hinako	世帯主 三女以下?	ユニオン魚店店主 ユニオン魚店事務	Powell 469 Powell 469	Mc.Gill 2275	郊外へ転居

“The British Columbia and Yukon Directory” より作成

認められたままの「Chinese」や両者の区別がつかないのか「Oriental」などと記されていた。しかし、1930年代になると、日本人に関する記載もほぼ正確になる。つまり、個人情報及時系列的に記録されているこの資料を活用すると、特定個人の居住暦とその生業暦の一部が把握できるのである。(第1表)

この資料における丸野吉太郎の初出は、1914年である。そこには、ランドワア街174番地(174 Landowre st.)で雑貨店(Glossary)を営んでいたと記されている。そして、3年後の1917年に西5番街221番地で雑貨店を開業していたことは、『加奈陀同胞発展史 第二(1917)』の記載と合致する。さらにBC Directoryには、その店舗とともにアパートも併営されていたことが記している。

詳細は不明であるが、1940年当時の火災保険図と称される大縮尺地図をみると、その様子は理解できよう。フェアビュー地区の南東部にあたる西5番街とコロンビア街(Columbia st.)とが交差点には、その北東部に“Apartments (Japanese)”と明記された日本人専用アパートがある。そして、その一角に“S”、つまり店舗(Shop)の併設が図示されている(第10図)。後述するように、やがて吉太郎はここを離れるが、彼が居住・経営していた当時も、このような形態であったのだろう。他にも、日本人が集住地区を表わすように、“Japanese Laundry (日本人専用洗濯店)”、“Japanese School (日本語学校)”の文字も見える。後者は、1921年に開設されたフェアビュー日本語学校である。



第10図 火災保険図にみる丸野商店があったフェアビュー地区南東部

やがて、1926（大正 15）年に丸野吉太郎はパウエル街 568 番地に転居している。大陸日報社の報告書によれば、以前ここには熊本県出身の成瀬旅館があった。転居の大きな理由として、フェアビュー地区に比べてパウエル地区のほうが多くの日本人顧客が見込まれたからであろう。それよりも、日本人集住区として伝統のある地区への進出を、吉太郎は名誉として捉えていたのかもしれない。パウエル街での丸野家の活躍については、別の機会に紹介したい。

3. キツラノ地区の日系ガーディナー

1908 年に発布されたレミュー協定によって、カナダへの日本人の移住は制限され、原則として家族の呼び寄せに限定された。1920 年代になると、日本人の排斥は厳しくなり、それは漁業ライセンスの制限・削減に顕著に現れた。そのようななか、ガーディナーとして活躍する日本人は決して少なくなかった。ただし、日本庭園を対象とするような造園業（Landscape Design）ではなく、庭園業（Maintenance）が生業であった。それまでは、中国人が多く就いていたが、少しずつ日本人が活躍するようになったのである。

1931 年のカナダ・センサスをみると、BC 州における民族別の庭園・造園業（*gardeners*）、花卉農業（*florist*）と養樹農業（*nurserymen*）への従事者数がわかる。日本人では、女性 3 名を含む 238 名がこれらに就いていた。統計上、3 種を細分した数値は不明であるが、そのほとんどは *gardeners*、つまり庭園業に従事していたのであろう。他民族では中国人が 996 名、イギリス（ブリティッシュ）系が 620 名、ドイツ・オーストリア人が 80 名である。そして、おもに中国人が日本人と同様の庭園業、他民族は造園業、または花卉農業と養樹農業に関わっていたと思われる。

『在米日本人史（1940）』にも、1938 年における BC 州のガーディナー数が判明する。そこには、「庭園業」としてバンクーバーに 173 名、フレーザー川流域に 3 名、バンクーバー島に 2 名の活躍がみられる。バンクーバーでの従事者数は、詳細な業種が不明である一般労働（585 名）、商業（568 名）、製材業（386 名）、漁業（200 名）に続く第 4 位を示す。また、1941 年のカナダ・センサスによれば、BC 州の就業構造について「その他の農業」に 101 人の日本人が就業していた。資料上、彼らはガーディナーと判断でき、同業に従事した全民族の約 1 割が日本人である。つまり、BC 州、とくにバンクーバーにおいてガーディナーを生業する日本人は、想像以上に多かったのである。

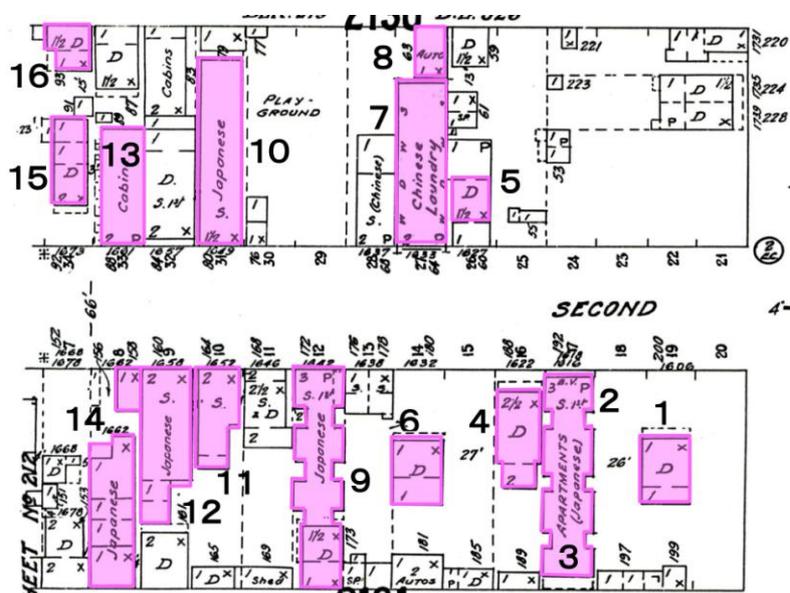
カナダにおける日本人の就業種と出身地とには、関係性が深い。ところが、先行研究で活用されてきた『加奈陀在留邦人々名録（1941）』をはじめとする日本人名簿には、常設店舗を経営する商店主しか職業名が記載されていない。そのため、業態が非常設店舗で、被雇用者がほとんどであったガーディナーについては、出身地からみた実態は把握できなかった。そこで、毎年発行される“*BC Directory*”と総称される住所氏名録を精査し、日本人名簿との併用から日系ガーディナーの居住地と出身地をみてみよう。

1941 年の“*BC Directory*”をみると、バンクーバーでは 144 人のガーディナーが確認で

きる。彼らの出身地では鳥取県が26人(18.1%)と最も多く、そのすべてが弓ヶ浜半島を中心とする西伯郡からの移住であった。そして滋賀県:25人(17.3%)、熊本県:11人(7.6%)に続いて、山口県と岡山県が各8人(各5.6%)、高知県と福島県が7人(各4.9%)である。製材業や商業への従事者の多い滋賀県、伐木業・鉱業への熊本県など、カナダ移民の著名な輩出県よりも、鳥取県が多くのガーディナーを生み出していることは興味深い。また、カナダ漁業界に多大な貢献をした和歌山県出身者は、ガーディナーにはわずか4名しか就いていない。

ガーディナーの居住地についても、特徴的である。彼らは日本人最大の居住区であるパウエル街や、日本人漁業者が集住したスティーブストンではなく、フレーザー・クリーク南岸のキツラノ地区やフェアビュー地区に居住することが多かった。それは、両地区に南接するショーネシー地区をはじめ、後背地には顧客となる上層のカナダ人宅が展開していたからである。バンクーバーの港湾地域にあたるパウエル街や、フレーザー川河口にカナリーが連立するスティーブストン周辺は、多くの日系ガーディナーにとっては必ずしも良好な環境ではなかったのである。

1941年当時、キツラノ地区には100世帯の日本人が居を構えていた。世帯主を出身県別にみると、最多は36名の滋賀県出身者で、29名の鳥取県出身者がそれに続き、両県出身者が過半数を占める。滋賀県出身者については12名が製材業に従事し、ガーディナーは7人である。それに対し、鳥取県出身者はほぼ半数の15名がガーディナーである。他県については、岡山・福島・鹿児島県出身者は各2名、和歌山・新潟・広島・福岡県では各1名がガーディナーとして活動していた。ガーディナーの総数は36名を数え、製材業の23名を上回っていた。つまり、キツラノ地区は、鳥取県出身者を中心とするガーディナーの集住区だった。そして、彼らの多くが“Japanese Apartment”に集住していたことが火災保険図によって明らかになったのである(第11図・第2表)。



第11図 火災保険図にみるキツラノ地区[一部] (番号は第2表と対応)

第2表 キツラノ地区（一部）における日系人の職業と出身地の詳細

No.	住所	居住者	配偶者	職業	出身地	勤務している製材所
1	1616 W. 2nd, Av.	角 芳松	Matsu	ガーディナー	鳥取県	
2	1616 W. 2nd, Av.	田中 為蔵 蔵原 Suetoshi KITASKA 川田 省三 佐賀 清重 梅本 四郎	Fujie Taeko 未記入 未記入 未記入 未記入	製材業 運転手 ガーディナー ガーディナー ガーディナー 販売員	滋賀県 熊本県 不明 鳥取県 鳥取県 滋賀県	R&H Sawmill (1550 Granvill)
3	1618 W. 2nd, Av.	八木 國末 KIMURA	未記入 未記入	ガーディナー ガーディナー	鹿児島県 不明	
4	1622 W. 2nd, Av.	尾本 子之助	Mitsuko	ガーディナー	滋賀県	
5	1627 W. 2nd, Av.	Mrs. TATSUMI	---	未亡人	不明	
6	1632 W. 2nd, Av.	坂口 三次郎	未記入	ガーディナー	不明	
7	1633 W. 2nd, Av.	辻 市太郎 松林 利平治	未記入 未記入	雑貨店経営 製材業	兵庫県 滋賀県	Ceder Cove S&D (1101 W. 6th. Av.)
8	1635 W. 2nd, Av.	足立 勝栄 足立 Yshio 足立 Kitsua JR.	Yuke 未記入 未記入	ガーディナー ガーディナー ガーディナー	鳥取県 鳥取県 鳥取県	
9	1642 W. 2nd, Av.	角 利顕 角 博愛 渡邊 敏博 渡邊 財得 武良 Tadao	Oiso 未記入 未記入 未記入 未記入	雑貨店経営 下宿業経営 製材業 製材業 ガーディナー	鳥取県西伯郡和田村 鳥取県西伯郡中濱村小篠津 鳥取県西伯郡和田村 鳥取県西伯郡和田村 鳥取県	Powell Lumber (1335 Powell St.) Powell Lumber (1335 Powell St.)
10	1649 W. 2nd, Av.	木村 政次郎	Katsuko	製菓業	滋賀県	
11	1652 W. 2nd, Av.	尾本 勇太郎 武良 國榮	Kath Tsokumia	製材業 ガーディナー	滋賀県 鳥取県	
12	1658 W. 2nd, Av.	西村 初太郎 竹中 捨吉 足立 要二	Aiko Kato Yozi	雑貨店経営 製材業 製材業	滋賀県 滋賀県 鳥取県	Sitka Spruce (1 1st. Av.)
13	1661 W. 2nd, Av.	大林 房次郎 大林 Toyo	未記入 未記入	未記入 理髪業	滋賀県 滋賀県	
14	1662 W. 2nd, Av.	村上 初太郎	未記入	製材業	熊本県	Cartwright Lumb, (Main & 1st. Av.)
15	1673 W. 2nd, Av.	西崎 武夫 西崎 武三郎	Isino 未記入	製材業 製材業	岡山県 岡山県	R&H Sawmill (1550 Granvill) R&H Sawmill (1550 Granvill)
16	1673 W. 2nd, Av.	赤田 新太郎 若林 Toku	未記入 未記入	製材業 製材業	滋賀県 滋賀県	R&H Sawmill (1550 Granvill)

※番号は第11図と対応

“BC Directory”より作成

VI おわりに

バンクーバーから約50km北方のハウサウンド湾東岸にあるブリタニア銅山は1888年に発見され、1908年に本格的な事業が始まった。全長およそ1700mのインクライン鉄道によって運ばれた銅鉱石は、8階建ての階段状の工場へ運ばれて砕鉱され、300mの坑道を経て埠頭に運ばれた。労働者ではイギリス人が最も多く、日本人がそれに続き、1916年の最盛期には350人を数えた。最初の日本人労働者は、1903年の北海道出身の会川喜一郎を筆頭とする14名である。工場の北東にあった日本人居住区には、学校や病院なども設けられた。このような鉱山集落のようすも災保険図から確認できる。

1888年、カナダ太平洋鉄道（Canadian Pacific Railway）が、バンクーバーまで全通した。建設にあたって中国人は、多大な労働力を提供した。しかし、完成後の保線作業に、彼らはほとんど携わらなかった。そのため、この作業、特に冬季の除雪作業を担う労働者が不足するようになった。このようななか、アメリカでさまざまな職種を経て、北太平洋鉄道会社の日本人請負業に従事した福井市出身の後藤佐織は、1906年にバンクーバーで日加用達株式会社を設立した。そして、1889年に設立された東京移民合資会社を経て、翌年

におよそ 1,000 人の鉄道工夫と 500 人の炭鉱夫となる契約移民が日本から送りこまれた。しかし、山奥の保線作業は厳しく、冬季の除雪作業では雪崩に巻き込まれる危険があった。ただし、鉄道基地としてのレベルストークの火災保険図には日本人居住区はみあたらない。やはり彼らは、貸車を宿舎として利用せざるを得なかったのだろう。

このように、火災保険図からカナダ日本人移民の諸相について読解できる可能性は広がるばかりである。歴史地理学的アプローチからの景観復原の方法への試行は、今後も継続される。このような課題については今後稿を改めて説明したい。

おもな参考資料

- 中山訊四郎『加奈陀同胞発展大鑑 付録』、1922 (『カナダ移民史資料 第2巻』、不二出版、1995)・『カナダ移民資料 第3巻』、不二出版、1995)
- 大陸日報社編『ビーシー州日本人電話帳』、大陸日報社、1931 (『カナダ移民史資料 第6巻』、不二出版、1995)
- 大陸日報社編『在加奈陀邦人人名録』、大陸日報社、1941 (『カナダ移民史資料 第6巻』、不二出版、1995)
- 吉田龍一編『加奈陀在留邦人人名録』、大陸日報社、1926 (『カナダ移民史資料 第6巻』、不二出版、1995)
- Bill Merilees, “*Newcastle Island: A Place of Discovery*”, 1998.
- B.Macdonald “*Vancouver : A Visual History*”, 1992.
- Diane L. Oswald “*Fire Insurance Maps Their history and Applications*”, Lacey Press, 1997, pp.1-102.
- Frances M. Woodward “*British Columbia Fire Insurance Plans: A Union List*”, 1979, pp.27-50.
- Frances M. Woodward “*Fire Insurance Plans and British Columbia Urban History : A Union List*”, BC STUDIES, no. 42, 1979, pp.13-26.
- George Young and John S. Lutz “*The Researcher’s Guide to British Columbia Directories 1901 – 1940 A Bibliography & Index*”, Public History Group University of Victoria, 1992, pp.1-108.
- Lorraine Dubreuil & Cheryl A. Woods “*CATALOGUE OF CANADIAN FIRE INSURANCE PLANS 1875 – 1975*”, OTTAWA, Occasional Papers of the Association of Canadian Map Libraries and Archives Number 6, 2002, pp.1-485.
- R.A.J.McDonald “*Making Vancouver*”, 1996.
- Sun Directories Limited “*The British Columbia and Yukon Directory*” (Microform : 1918-1948)